

# 津波堆積物のはぎ取り標本



地質標本館ロビーにある津波堆積物のはぎ取り標本。2013年に仙台市若林区で採取された研究試料をはぎ取って保存し、展示のためL字型に組み合わせたもの。標本を観察すると、3層の津波堆積物（上から2011年、1454年享徳地震、869年貞観地震）を確認することができる。また、青森県と秋田県の県境をまたぐ火山（十和田）の噴火により飛んできた火山灰の層（十和田a火山灰；西暦915年）も見られる。（写真はGSI研究資料集612より転載）

大きな津波は海岸の砂を運び、陸上に「津波堆積物」と呼ばれる地層を残します。私たちは、そうして残された津波堆積物を過去の津波の直接的な証拠としてとらえ、日本各地で調査・研究を行ってきました。

2004年から2010年の間に宮城県から茨城県の海岸で掘削調査をしたところ、過去4000年間に数回の大きな津波が襲来していたことが分かりました。さらに、詳しく年代測定を行うと、これらの津波は450年～800年ごとに来ていたことも分かりました。

地質標本館のロビーにある標本で最もはっきり見える津波堆積物は、西暦869年に発生した貞観地震によるものです。普通のボーリング調査では直径5cm～10cm程度の孔しか掘りませんが、仙台市で行った調査では地層抜き取り装置という特別なものを使って地層を採取しました。その結果、幅1m×3枚の迫力ある地層の標本を作製することができました。実際に標本をご覧になって、津波の繰り返しとその後の環境の回復が作った地層の重なりを感じていただければと思います。（活断層・火山研究部門 澤井 祐紀）